

## 本当にお米になるのかな？ 福島市立金谷川幼稚園(福島県福島市)

[5 歳児]

**春** <毎日通る玄関前の田んぼ> 環境：玄関前の田んぼを作り、脇に稲を置く

「何だろう？」と興味をもつ子、「見たことある！」「田んぼに植えるものだよ」と気付いている子など、様々な様子が見られた。

子どもたちは玄関に集まり、田植えについて話を聞く。初めて田植えを行う子どもがほとんどだったので、少し緊張している様子が見られる。

保育者の説明を聞くことで、早く植えたいという気持ちになっていく。

ちょっと難しいなあ

うわあ！土がドロドロしているよ！



<田んぼの中に何かがある...> 環境：毎日観察できる田んぼで、稲以外の動植物を見つけることができる  
田植えを行ってから、子どもたちは登園時に、毎日、田んぼを見てから幼稚園に入るようになる。そして、少しでも変化があると、保育者や他の子どもに話しをする。

A児が、「先生、田んぼの中に何かがあるよ！」と言う。

「本当だ！これは、なんだろうね？」「あ、これは、オタマジャクシだ！」「こっちは、カタツムリみたいだよ！」「違うよ！これ、タニシって言うの！」などと、田んぼの中にいる生き物を見つけて大喜びである。「あれ？この小さい葉っぱは、何かな？」と水草も発見する。子どもたちはわからない様子だったので、「水草」ということを知らせていく。B児は「水草って、雨が降ると出てくるの！だって、名前に“水”って付いているでしょ。雨は水だから雨が降ると水草ができるの！」と、自分で考えた意見を言う。



<稲の生長に気付く> 環境：稲の生長を感じることができる

<気付く・疑問をもつ> 植えた時よりも増えている

周りにいた子どもは田んぼに行き、友達と一緒に確認し合っている。確かに、本数は増えていた。調べてみると、これは茎の本数が分かれて増えるという「分けつ」だということがわかる。

<気付く・確かめる> 割り箸を使い、どこまで伸びたのか計る

どれくらい伸びたのかわからないので計ってみたところ、割り箸1本と2本目の下の方まで伸びていることがわかる。

**夏** <丈夫な稲になるように水を抜くことを知る> 環境：いつもと違い田んぼに水がない

「大変！田んぼに水がない」と気付き驚く。A児は「水は、土の中に沈んでしまったの！」B児は「きつと、乾いてしまったんだよ！」などと、自分の考えを話していた。B児は「時々ね、田んぼは水を抜くんだよ。うちのおじいちゃんの田んぼも、そうしているもん」と言う。すると、「私のおじいちゃんの田んぼも、水抜いているところを見たことある！」「僕も！」などと言って、B児の意見に同感していた。「水がなくても、稲は枯れないんだね。」と、共感し栽培途中に水抜きをすると丈夫な稲になることをB児の発言をもとにみんなに知らせる。

<お米が付いている> 環境：夏休みの間にさらに分けつが進み、茎も太くなるなど様々な変化がある

2学期が始まり、子どもたちは登園時に稲の生長にびっくりする。「うわ～すごい！」「こんなに大きくなっている！」「お米が付いている！」稲の変化に一人ひとりが気付き感動する。

**秋** <白いひげ発見> 環境：稲の育ちについて教えてくれる祖父母がいる

稲穂に白くて小さいひげのようなものを発見し、C児は「見てみて！」と大騒ぎになり、降園時に祖父母に聞くことになる。B児の祖母は「これはね、稲穂の花だぞい！」と教えてくれた。「へ～お米に花が咲くの？」「何でも花が咲くんだね」「初めて見たよ」「すごいね」と観察をしていったことで、お米にも花が咲くことがわかり、みんなの感動の声があがる。

【考察】環境構成の工夫ということで、今年度、田んぼを作り観察をしたことで、多くの気付きや感動を得ることができた。園内でもできる活動を工夫することは、大切であることがわかった。

### みどころ

稲作の活動は春の田植えから収穫の秋、さらには食べたり糞で活動したりすることで冬までの四季を通じた取り組みになります。長い活動であっても、子どもたちの気付きや疑問、驚きなどの体験を大切にすることで、意欲的に豊かな体験を重ねることが期待できます。また、周辺の生き物などの環境や稲について教えてくれる地域の方など人的な環境も重要なことがわかります。